

# 北海道礼文島寺院調査

蓮 見 高 純

(現代宗教研究所研究員)

## はじめに

礼文島は、天然の良港には恵まれていない。北の船舶港と、南の香深港かぶかの二つが、フェリーボートの発着港で、この地区がそのまま礼文島の南北の中心地であり、香深村と、船舶村を作っている。昭和三十一年に、町村合併をして現在の礼文町になる。行政的には、一島一町である。

礼文島は、南北二九・八キロ、東西七・九キロの細長い島である。

利尻島の鷺泊港から礼文島の香深港までは、航程一時間半のフェリーボートの旅であった。港の突端を船がまわるとすぐに、波頭かなたに見える礼文島の島かげは、低い山がうねうねと続く半島様の地形で、利尻島とは大きな差を見せている。フェリーが進むにつれて、船尾デッキから振り返り振り返り確認する利尻島の姿は、利尻富士の名にふさわしく、秀麗な山容をいよいよ整える。

礼文の港に近づくと、まわりの丘という丘が全て牧草地におおわれた、肥沃の大地が見えてくる。しかしこれは目の見誤りであったことが、上陸後すぐわかる。遠望して牧草と思われた緑の絨毯は、すべて熊笹の密生であった。

三日間の在島中、荒天に会い、この背の低い熊笹が、北の海からの強風に煽られて、ちぎれんばかりにうち震え、時折まじる大粒の雨にたたかれているのを、何度も目撃することになるが、やがて来る極寒の凍りついた地表に吹き

荒れるブリザードの季節を思い、すざまじい光景を想像した。

かつて島は、大木が茂っていたという。山奥には、今までも原生のナラの大木がある。

火山でできた利尻島に対して、礼文島は、大地の褶曲によってできた。そのことを見事に証明している桃岩、地蔵岩の奇観を、調査行の合い間に案内していただき、驚いたのであった。

人口は、昭和三〇年の九八七四人をピークに、急激に減りはじめ、三〇年代に一五〇〇人、四〇年代に一八一八人と落ち込みを見せ、昭和五五年には、全人口は五九五人となった。

礼文島には、香深地区と船泊地区とに別れて、四宗派（浄土・門徒・禅・日蓮宗）の寺院が各々一カ寺ずつ建てられ、合計八カ寺ある。

船泊の日蓮宗寺院は、地区にある四カ寺の中でもさらに北寄りに位置を占めており、日本の最北端にある寺院、ということになる。

## 一、礼文島に見られた信仰の形態

### 来島者は出身地での宗旨を守った

礼文島には、四宗派の寺院が、北の船泊、南の香深地区に一カ寺ずつ、合計八カ寺ある。

本宗寺院、A寺・B寺共に、檀家は、来島前もやはり日蓮宗の檀家であったという。島民の多くは、能登・加賀・青森・秋田から集団で移住して来たものであるが、集団で特定の宗派に入檀するということはなかった。来島者は、それぞれの出身地での宗旨を守り、二地区に一カ寺ずつある、既成四宗派に帰属したという。

当時は、辺境の地であった礼文島に渡った人々が、ふるさとでの宗旨を固く守り、先祖を供養することは、遠く離れて来たふるさとの人々との絆を繰り返し強く確認することであり、今日を生きる心の支えであったろう。同行案内

してくれたH師は、それは帰巢本能ともいふべきものと言っていた。

開拓の厳しい労働の中で、信仰を同じくする者が寄り合うことは、当然のことと思われる。

### 豊漁を願い、航海の安全を祈る

B寺のある檀家の床の間には、金毘羅様・龍神様・フナダマ様などの掛軸がかけられる例が多く、その多くは、行者の勧めによって、買い求めたものだという。このように、漁業に関係した守護神をまつる信仰がある。

最近では、観音・地藏信仰をすすめ、お題目を唱え、因縁出しを行い、信者を集める活動がある。

A寺では、ニシン漁が盛んな時は、祈禱をすることが多かった。それは、七面様を守護神と仰ぐ、漁業信仰であつて、豊漁を祈願した。他宗の者が信徒として多く集つた。

数の上でみると、B寺では、その当時の一代法華を入れた総檀信徒数は、現在の二倍位はいただろうとのことで、単純計算では、四割が信徒、六割が檀徒ということになる。

板子一枚下は地獄といわれる漁業従事者の安全を祈る人々の信仰と、豊漁を祈願しての七面信仰・鬼子母神信仰が、宗旨を問わずに、多数の信者を集めていたといえる。現在は、A寺・B寺共に、この七面信仰の流れをくむ鬼子母神祭を開いている。B寺では、二〇〇三〇人の人々が集り、題目修行を中心として、先祖回向や法楽加持が行なわれており、かつてとはその様相を変えている。

### 間法の機会を得て改宗する

信徒となることはあつても、出身地からの宗旨を守っていた人々が、日蓮宗の檀徒になることがあつた。

B寺では、門徒からの入檀が多いという。網元の親方さんが、一族をつれて改宗したことが四例あつた。

A寺では、宗旨がえをして入信する者に、鬼子母神信仰によるものと、漁業の祈願によるものとをあげている。一代法華の者は、鬼子母神様に子を守られた、病を治してもらつた人であるという。

他宗からの入檀の例は、守護神信仰をとうしての布教教化の成果である。その多くは、漁業祈願のための修法布教が、聞法の機会となつて、信徒から檀徒へと信仰を移したものである。

### 労働の息吹とともにある、熱い信仰心

新住職になつて間もない、若いB寺の住職夫妻には、檀家からの大きな期待が寄せられている。

「日蓮宗の為には、今までの二倍も三倍も骨折ってもらわねば。命日には、みな待つているよ。〈雪あけ〉の意味を込めて、春のお彼岸を勤めてほしい」と、檀家の一人は熱を込めて語る。

礼文島では、病人の他は、皆、働いているといわれ、パートタイムの賃労働で、コンブ乾し、ウニの加工、サカナの網はずしなどに従事している。忙しい仕事の合間をぬつて檀信徒は、寺の行事に参加して来る。

B寺では、女性が世話人として活躍している。和讃講が盛んでもある。

寺に集い来る人々の信仰心には、日本の最北の極寒の地で、激しい労働を展開して来た開拓者達と同じ熱いものが流れていることが感じられた。

B寺の三宝尊は、大正五年から三人の篤信の者が、礼文島はもとより、利尻島まで勧進して、三銭、五銭といただき、それをもつて造立することができたという。

檀徒の求道心は、伝統的に強いものがあり、それはまた、厳しい労働の中に根ざされ、心の支えとなつてきたものである。若い新住職夫妻に、明るい心の通つた布教を展開してもらいたいと、檀信徒の期待の集るゆえんである。

### 開教の地につきり結び、寺檀のまじわり

地域の過疎化が進み、檀信徒が急激に減つてきた結果生じた、寺門の経営の苦しさは、推察に難くない。教師の兼職が考えられるが、檀信徒はそれを望まない。

「ダメだ。和尚さんがそういう商売に走るようじゃ、いても、いてももらわなくても同じだ。命日には、みんな待つて

いるんだから。そのかわり、和尚さん、家族がやっていけるように、檀家ががんばるよ」

檀徒は、住職が兼職をしないで寺づとめに励んでほしいと願っており、その為には、物心両面の外護を約束しており、懸命にそれを実行している。檀信徒は、寺に供養の品を届けて、寺族の経済を扶けている。B寺では、檀徒の発案で、漁業収穫の中から、傷ついて商品価値の低いアキアジ(サケをいう)などを例として、供養の品が絶えない。

私達調査員一行も、この折に、アキアジ・カニ・タコなどの供養の品々による暖いもてなしを受け、あわせて、今でこそ過疎が進んでいる、かつての開教の地にしっかり結び合う、寺と檀徒の絆の強さを味わわせていただいた思いである。

## 二、寺院の現況

### 急激に減少する檀徒・信徒

基幹産業である漁業の不振から、島全体に過疎化が進み、住民が高齢化している現実に、A寺・B寺とて、その影響下にあることに変わりない。

B寺では、昭和三九年に七〇戸あった檀家が、現在は六十一戸に減少した。一三年間に六パーセントずつ減ったことになる。漁業従事者の後継者がいなくなるために、檀家が減るのだという。一代法華を含めた総檀信徒数は、かつて現在の二倍位はいたということから推して、その減少はもつとはなはだしいものであったろう。

A寺では檀家の減少はさらに急なものがあり、昭和二〇年代の約一五〇戸から現在の四七戸に減っている。実際の人口の減少が昭和三〇年代を過ぎてからであったことを考慮すると、一〇年間に二三パーセントずつの減少となる。

### 住職が、からくも支える寺の維持

A寺は、礼文島の中で、現在、檀家の数が最も少ない寺である。寺の維持が困難な状況にあることでは、A寺もB

寺も同様である。

B寺では、護持会費は、年間、一軒あたり五、八千円で、多い人で二万円である。檀信徒は収入に応じて護持会費を納めている。護持会費を寺の維持管理にあてているが、電気代・水道代などの経常費を支弁するだけでもたいへんであるという。お会式と、他に一回集る供米も、直接、寺族の経済を支えている。

A寺では、これよりさらに寺の経済は困難なものがあるうと思われる。

〔(経済的に)寺の収入では維持できないのに、どうやらこうやら暮しているのも、ヘンですね。どこにも、金の成る木もないのに、ヘンですね(笑)〕と、H師は、快活に笑い飛ばしながら、A寺の三宝尊の修復、堂宇の整備の多くは、住職が私財を投げ抛って進められて来たものであることを教えてくれた。

A寺・B寺ともに、住職は、法務のみを専らとしている。同様、月経・回向まわりをかかさず勤めている(各宗派とも実施)。

護持会があるものの、それだけでは、十分な維持は困難なものがあり、住職の得る布施収入によって、からくも維持されている現状である。

### 三、礼文島の現状

若者は職を求めて島を離れ、老人もやがて後を追う

浜に札束がつきあがる、と聞いて、多くの人々が集団で、ニシン漁を追って内地から島に移住してきた。昭和二八年を最後として、ニシンが沿岸から去って、全く獲れなくなった。そして、極寒の海での漁期の限られた沿岸漁業の構造の変化、そして規模の縮小、このことは、久住師の利尻島寺院調査報告でくわしく述べ、礼文島での取材でも、状況は全く同様であった。

一九六一年の厳冬期には、いつになく流水が押し寄せて、礼文島と利尻島との間の海峡が全面的に閉鎖されること、二カ月間に及んだという。「利尻と礼文の間の海が、まるでイナバの白ウサギだったもんなあ。もう、どうしようもなかったよ」。当然、日常生活面への影響は大きく、食料はヘリコプターで空輸して確保したが、物価は上り、島民の受けた打撃は大きかった。

漁業資源への被害も大きかった。アワビは全滅、ウニも悪く、コンブもとれなかった。

二カ月もの間、流水が滞留したのは、例年にならないことであつたが、島民のだけれども、極北の地の孤島の悲哀と自然の猛威を、あらためて、味わわれた。冬ごもりは半年間であるという。

このような状況の中で、若者は職を求めて島を離れる。壮年層は出稼ぎに出る。A寺では、四七戸の檀家のうち、一〇戸位は出稼家族である。

こうなると、地域が極度に高齢化されるわけであるが、それがどのようなものであるか、われわれ都会に住む者には、想像でしかわからない。私達が投宿した旅館は、船泊の市街地の中ほどにあつたが、早朝の出勤時には、近くの住宅から相乗りの乗用車が二、三台発進するのを見るくらいで、昼間の人々の行き来は、全くといっていいほど見られない。都会と全く変らない商品が並べられている、街のコンビニエンスストアに立ち寄る客のあまりにもまばらであつた印象が、今でも鮮明に浮んでくる。

離島した子供がその土地に定着すると、続いて親、そして老人がつづく。親たちは、島にとどまって、働くだけ働いてダメになると、離島した子供の所へ行ってしまふ。また老人夫妻も、島にとどまっても、どちらかが欠けると、離島の生活に不安を感じて、子供は親を都会へ引き取る、といった、過疎地域に一樣にみられる現象が、ここにもあつた。

転入転出の島の歴史と、墓を建てずに納骨堂を建てることに、因果関係はあるか？

一般的に礼文島では、墓石を建立することは少ないという。船泊地区では、墓地は火葬場週辺の寂しい所にある。B寺では境内に歴代墓があるのみで、A寺でも、数える程の墓石しか見当らない。

遺骨は、本堂に隣接している納骨堂に納められる。厳しい冬期の寒さの中では、墓参もままならないので、北海道どこでもそうだが、納骨堂を建てるのだと聞いた。

ところが、二、三年程前から先祖墓や墓石を建てる傾向があるという。この傾向は、稚内方面からの墓石業者が動入して来たものだという。

過疎化が進み、檀家を離れる例が多い中でこの動きは、何を意味するものなのかを、にわかには断定することはむずかしい。

島を離れる人々は、墓を移さないようだという。お盆の行事ぐらいには、墓参にもどる。しかし、行き先で家族に不幸があると、日蓮宗の寺院を選んで世話になっている。離島者は、島をはなれても、その土地でもやはり日蓮宗の檀徒になっていると、A寺の住職は話していた。

B寺での事例。いろいろと話をしてくれたその檀徒は、既に東京に墓石が作っており、納骨もある。現在はB寺にお世話になっているが、自分が死んだら、遺骨は東京の墓に持って行くだろうと言っていた。

島への移住、そして転出の大きな時代の動きの中で、高齢者の方々が、先き行きの選択に迫られていることは、窺い知ることができよう。

### あとがき

このレポートは、現地でのインタビューと取材で得たデータをもってまとめた。データは八六項を数え、これを五グループに分類して論述を試みたが、その内で三九項は、ニシンの好不漁が左右した島の歴史と現在の状況とを叙述



するものであった。調査活動の多くを、過疎化進展の状況を把握することに費やし、寺院の布教活動の調査の爲には、不十分と言わざるを得ない。一方で、このことは、島がたどった産業構造の変化と、開教布教所・寺院の存在とが大きなかわりを持つていたことを明らかにした。

北海道開拓という時代の流れの中で、島の盛衰を一つの座標としてさぐるとき、開拓地開教の法の燈が高く掲げられ、そこに、弘通精神に燃えた教師がいたことを知った。

A寺のN老僧に、一葉の写真を見せていただいた。その写真に、かつて北海道陸別に法華村の建設をめざし、開教のため説教所（前啓寺）にあつて、開拓者の心の支えとなつた広瀬啓宣師（一八七六一一九四四）の姿を見出し、その姿は開教の心に燃えた、多くの弟子に囲まれたものであつた。N師は広瀬啓宣師の弟子の一人であつた（法華村・広瀬啓宣師については、「現代宗教研究」十九号を参照されたい）。

調査を案内していただいたH師は、宗門として離島寺院のみのコミュニティーセンターでも設けられれば、（地域住民と共に悩み、共に苦しみ、共に楽しみ、法の輪を広げることができると、これからのあり方に提言をしていった）。

開教の先駆者が教線を張つた町も今は、姿を変えた。しかし、人口が減り、檀徒が減少しても、この地域が「お題目充満地帯——（筆者）」であることに変りはない。

このことは、時代の流れと人口の推移をいち早く見極めて、布教所を開設し、学徳兼備の人材を登用することが大切であつたことを、開教布教の一つの歴史として我々に教えてくれる。

一方、全国のいたるところに膨張を続ける新興都市部での布教情況に眼を転じたとき、そこには、「お題目過疎（希薄）地帯」が急激に生成されているという事実につきあたるのではないだろうか。

であるならば、礼文島の寺院がかかえる諸問題は、過疎化現象の中で問題解決をはかるといふよりも、むしろ、開

教布教の叡知として生かされつつ、新興都市部布教という命題の中で考えられるべき性質を帯びてくると思う。

#### 利尻島・礼文島寺院調査後記

現宗研調査部が進めている寺院調査の一環として、北海道北部管内（釈英照宗務所長）の孤島、利尻・礼文の二島を、昭和六〇年九月二十九日から一〇月二日の予定で実施した。

礼文島から帰る予定日が、一〇月初旬というのに、早い冬の海、「うけ」という季節風が荒れて船も飛行機も動かず、改めて当地の冬の恐しさを知った思いの、一日延期滞在調査行を終了した。

調査には、現宗研所員の高橋謙祐・望月兼雄 研究員の常岡裕道・蓮見高純（礼文島調査に参加）、囑託の久住謙是、計五名が参加した。

調査に当たり、利尻・礼文各寺院の心温まるご理解とご協力を頂き、改めて厚く御礼申し上げます。

とくに、利尻・礼文両島をご案内下さった妙泰寺住職平元正海上人は、ご自坊のお会式を目前にして、大切な時間を割愛してご尽力下さいました。また、嵐で船が出ない間、妙慶寺住職斉藤芳伸上人夫妻にも、大へんお世話になりました。ありがとうございました。